

黒名ユウ

挿絵 kakao

ラッキースケベが
無双が
すぎる

俺とエッチをする
権利書が出回って

試し読み版

第一章 俺と、エツチをする権利

第二章 俺におっぱいを揉まれる権利

第三章 俺にフェラチオをする権利

第四章 俺にアソコを舐められる権利

第五章 俺とお尻エツチをする権利

第六章 俺とエツチをする権利

登場人物紹介

高瀬瑠々 たかせるるな

望月美卯 もちつきみう

清玲寺亜希 せいらいしあき

女子テニス部主将。学園理事長の孫娘でもありハイソなお嬢様として全校でも有名人。

圭一のクラスの委員長。美人すぎるせいか近寄りがたい雰囲気を持つ少女。

圭一の幼馴染の少女。気が強くハキハキした性格だが真面目で性的知識には初的な側面もある。

上杉あかり うえすぎあかり

陽気で快活、茶目がある美卯の親友の少女。面白すぎることにすぐ首を突っ込む。

幸村圭一 ゆきむらけいいち

年頃のスケベ心を隠しながら学園生活を送るごく普通の男子学生。

ちゅぽおっ……ちゅぽぼっ……れろれろっ……れろっ！

ついさつきまでは交互に行われていたパンチボール舐めが、両乳頭同時で高速往復する。「くううっ……う、あ……ああっ……おかし……おかしくなっちゃう……！」

溜々菜の大きく見開かれた目が宙をさまよい、胸にしやぶりつく圭一の頭を抱き締めるように掴んだ両手に力がこもり、爪が立てられた。

それでも舌の動きは止まることなく、爪がどころかいつそうスピードを増して口の中でふたつの乳頭をシンバルする。

じゅばあっ！ ちゅぽぽぽぼっ……ちゅぷっ、ちゅぷぷぷ、ちゅうっふうううっ！
そして、思い切り吸い上げながら顔を持ち上げていく。

上方へと引つ張られて流線形に伸びゆく大きな両の乳房。それは最後には唾液で滑って口から離れ、びゅるんっパチンツと音を立てると胸の上にたゆゆと広がり弛緩した。

溜々菜を見れば火照りで顔を上気させ、ハッ、ハアツと荒い息を吐いている。
潤んだ瞳の端に微かに光る涙を認めてギクツとし、慌てて気遣う。

「ごっ、ごめん……夢中になっちゃった……！」
「ううん……この涙は違う……」

「えっ？」

「こんなにエッチなこと……いやらしいことを私がしてもらえるなんて……嬉しくて
そう言いながら、溜々菜が優しい顔をする。

それは——初めて見る彼女の——笑顔だった。

「お願い……もつと、いやらしいこと、して……私のおっぱい、弄って……」
言われなくても！

圭一は身を横たえたままねだる彼女に再び覆い被さった。

胸の谷間に顔を押し付けて彼女の温もりと肉の柔らかさを存分に楽しむ。

「はあっ……くううっ……んんっ、んっ……嬉しい……嬉しいよ……ああっ……感じる！」
鷲掴みに引き寄せられた乳房が頬に擦れる度、唇に触れる度、舌で舐め上げられる度に
溜々菜は切なげな声を漏らし、そして感度はますます高まっていつているようだった。

圭一の頭を両手で掴み、悶え狂う美少女の悦哭が興奮に拍車をかける。

「もつと……は、あはあっ……そ、そう……んっ！ エツチに……ああんっ……エツチに
揉んで……！ 私がおかしくなってしまうぐらい……はああっ……んあっ！ おっぱい壊
れるぐらい……激しく……して……！」

（ああ、くそっ……エ……エロすぎて……俺の方がおかしくなりそうだ！）

「高瀬さんっ……ああっ……たっ、高瀬さんっ……」

むにっ……にゅむっ……ぐにいいっ！ むにゅむにゅむにゅううっ！

おっぱいで溺れ死にそんな勢いで、たわませ、歪め、押し潰す。文句のつけようのない
揉みっぷり。権利書に偽りなしだ。

だが、それだけで満足するように男の体はできていない。

（ああっ、もう我慢できないよ……！　アソコが爆発しそうだ！）

そうなのだ。圭一の股間では、ペニスがすでに臨界寸前となっていた。パンパンに膨れ上がり、ガチガチに硬直して制服のストラックスを内から外へと突き上げている。

これをどうにか……どうにかしたい！

（そうだ……いい、いいよな。揉むのは手だけって決まっているわけじゃない……！）

「高瀬さん……他のモノでもおっぱいを弄ってあげるからね！」

「え……？」

体を起こすとカチャカチャと音を立ててベルトを外し、ズボンと下着を脱ぎ捨てる。

「お……大きい……」

目を見張る美少女の身体を跨ぎ、猛る肉棒を乳房の上空に誇示する圭一。

「何か、知ってるよね？」

「……」

黙ったままコクリとする溜々菜。

「これ、なんて言うか口に出して言ってみて」

「おち……」

途中まで言いかけて口ごもる溜々菜。

さしもの彼女も露骨にその部分の名称を言うのは抵抗があるらしい。それでも、そそり立つそれから目を逸らすことができずに、じっと見つめたままにいる。

興味ありどころではない、それでして欲しいというのが瞳の奥の疼きでわかる。

「言って。そしたら……」

ダメ押しの一言。

「……これで滅茶苦茶にしてあげるから」

「……！」

「壊れるぐらいして欲しいんだよね？」

「うん……して……欲しい……」

熱に浮かされたように溜々菜。

「何でして欲しいのか、ちゃんと言葉で聞かせて、さあ……」

「お……おちん……」

言いかけて、再び葛藤。

しかし、圭一が勃起をピクンピクンと震わせると、彼女の羞恥心は欲望に白旗を上げた。

「……お、おちんちん……おちんちんで……わ……私の……おっぱいを……ううっ……」

口にしただけで感じてしまったのか、言葉が上ずる。

「……私のおっぱいを、おちんちんで……滅茶苦茶に……ああっ……！」

最後まで待ちきれず、圭一は溜々菜の言葉の途中で左右の乳房を中央にピッタリと密着

させ、その隙間に灼熱の肉槍を振じり込んだ。

むにっ……ずぶ、ずぶううっ……。

チンポがおっぱいに包み込まれていく感触。それはとても不思議で矛盾した感覚だった。むっちりとした肉圧は確かにあるのに、まるでガスバーナーで溶かされる雪のように、抵抗なく肉棒を受け入れる。肉の狭間を犯されることへの慄わなきに震えながらも、ふたつの乳房は己に触れる男の器官の形を寸分違わず感じ取ろうと吸いついてくる。

「熱い……ああ、それにこの匂い……男の子の匂い。やらしい気持ちになる匂い……」
豊乳の谷を灼く男根にうっとりとして身を委ねる溜々菜。

その鼻先に突き出し、熱息を吐きかける亀頭の先端には既にカウパーが滲み出ている。
「高瀬……さんのおっぱいも……いやらしいよ……俺のがもつと硬くなっちゃう！」

寄せた乳房を両手でぐいぐい揉み込みながら腰を進退させてチンポの先から根元まで、全てで味わう。尖った乳首を指先で弾き、押し込むのも忘れない。

「ひうっ……くひいっ……ああんっ！」

溜々菜も感極まった声で鳴く。

しかし、まだこれからだ！

「おっぱい、自分で支えてみて！ こうして……チンポを挟み込んで」

彼女の手を双乳にあてがわせると、圭一は腕立ての姿勢となつて激しく腰を振り立てた。
ぱんっぱんっぱんっ！

揺れる睾丸が彼女の鳩尾みぞおちを打つ。

「んああっ……凄い……！ こんな……激し……熱っ……ああっ、おっぱい燃えちゃう！」

「約束したろ！ 滅茶苦茶にしてあげるって！」

「はあああんっ！ おちんちんっ……こすれるうっ！ わ、私のおっぱい、おちんちんに犯されてる！ んはあああっ！」

乳房への摩擦をより強く感じようと、溜々菜の手に力がこもる。

「うおおおっ……高瀬さんっ……高瀬さんっ……」

「ずぶずぶずぶずぶ……にゅにゅむにゅっ……どすどすどすうっ！」

「ああんっ……ああああーっ……私、おかしくなっちゃう……おかしくなるっ……んっ、んはあっ……おっぱい、熱いの！ 何も考えられない！ おちんちんに犯されて、ああっ、おっぱい痺れて……！ ふあっ、あああ、あああああああーっ！」

階段の近くを誰かが通りかかれば間違いないと聞こえる大声で溜々菜が叫んだ。

「なっ……何か来る……来ちゃう……あ……あーっ！ 何か来るの！ これっ……私っ……私いっ……んひぐっ!!」

「俺も最高に気持ちいいよ！ ああっ、もう駄目だ！ 我慢できない……!」

「私もっ……ふああっ……何かが広がって……あっ……ああっ……く、来るっ……!」

最後のひと突きをガツと深く挿し込んで身を伏せる圭一。

込み上げる熱いものがその下半身から美乳の間に勢いよく解き放たれる。

びゅううううっ！ どぐっ……どぐうっ……びゅぐぐっ……どぷるっ……!」

熱濁のぬめる感触が胸の上に射出されたのを引き金に、溜々菜の身体が大きく跳ねた。

「あぐうっ……ん、出てる！ 幸村君の熱いの出てるっ！ おっぱいにいっぱい……とろけて……広がるっ……熱いの、溶かすの！ おっぱいを……ああっ、ああああーっ！」
びぐっ、びぐんっ……びくびぐんっ！

何度も何度も身体を震わせ、快感の山頂で上昇気流に翻弄される鳥になる。

「はあっ……はあ……はあっ……はあっ……はあっ……」

彼女の荒い息づかいを耳にしながら、圭一は吐精を果たした自分のものが急速に萎しぼんでいくのを感じた。溜々菜が強く合わせ押さえるおっぱいに挟まれたままの収縮だ。

体を離して見下ろすと、彼女の胸はベトベトになっていた。

（うわ……これ、全部俺の……）

自分でも驚くほどの大量ザーメン。白濁にまみれた白い肌。汚された少女の胸部は美しくもどこか陰惨な淫らさがあり、それが圭一にほのかな征服感を覚えさせる。

ここでようやく溜々菜が力なく手を放し、乳房とペニスが解放された。

ねちよお……。

右と左に分かれたふたつの山と、ぐにやりと垂れた肉棒の間に粘つく糸の橋がかかり、その淫猥な眺めが再び圭一の股間を反応させる。

このおっぱいをもっともっと征服したい。自分のものにしたという衝動。

溜々菜を抱き起こして壁に背を預けて座らせ、尋ねる。

「気持ち良かった？」

「う…………ん」

彼女はまだ快感の余韻の中で朦朧もうろうとしていているようだった。

「おっぱい、汚しちゃってごめん」

「いいの…………こうして欲しかった…………か…………ら…………」

男子が近寄らないというコンプレックスは、一体どれほどの欲望を抱えさせていたのだろうか。こうなったらとことんまで——この孤独な美少女の妄想を超えるほどに、エッチなことをしてあげたい。

「…………おっぱい、綺麗にしないとイケないね」

「え…………？」

「その、ほら、胸…………ベトベトだから…………自分で舐めて拭き取ったらどうかな」

(なっ…………なんつーこと言ってんだ、俺は…………！)

自分でも引くほどのドスケベ提案だったが、不思議と、溜々菜は多分そうするだろうという確信のようなものがあつた。何を考えているかわからない彼女だが、エッチに関することで今のところ拒絶はない。それどころか、常にそれ以上を望んでいる節がある。

そして案の定。

「うん…………」

圭一の言葉に対してぼんやりした瞳のまま黙っていた彼女だったが、小さく頷くと片方の乳房を持ち上げ、そこに小さな舌を伸ばして這わせ始めた。

ピチャ……ぺちよ……ぺちよ……ぺちよ……

粘つく精液をすくい取る動きで赤い舌腹がひらひらと宙を泳ぐ。

「ん……ちゅぶ……はあっ……これ……幸村君の……精子……」

うっとりとして白濁を舌に絡ませ、胸から口の中へと移しとる。

その所作自体は可憐であったが、乱れた制服に曝け出した豊乳から、無心にザーメンを舐め取る美少女という光景は淫らなことこの上なしだ。

「んっ……ちゅぶっ……ゆっ、幸村君のせえし……生臭くて……ぺろっ……ああ……舐めてたら……ま、また……やらしい気持ちになつてきちゃう……」

自分で気づいているのかいないのか、乳房を持つ彼女の指先が、乳首をクリクリと弄り出す。舐めている方の胸は指で乳頭を、そしてもう一方のおっぱいは逆の手で全体を。

「くふっ……ペロッ……ちゅばっ……んんっ……はあっ……おっぱい、感じる……」

(い、いやらしい……)

圭一はゴクリと生唾を呑んだ。

できればずつと眺めていたい。しかし、完全に復活してきた股間のイチモツが、俺にも参加させると激しく自己主張をする。

「たっ……高瀬さん……俺も手伝うよ」

上ずった声で言つて立ち上がり、彼女が舐めていない方の乳房の前に怒張を突きつける。「高瀬さんは、そのままそつちを舐めていて……」

そして——圭一は乳首の辺りに狙いを定めると、グイと腰を突き出し、硬くなった肉棒を深々と沈めた。

ぽにゅううううっ！

「んああっ！」

溜々菜が大きな声を上げる。

指で押し込まれたときも同じように悦びの反応をしたことから見て、彼女はこれに弱いらしい。そのままグイグイグニグニとチンポで乳肉の中を掻き回してやると、ヨガリ声はいっそう激しさを増した。

「あふうっ……それ、駄目えっ……ん、はううっ……か、感じすぎる……ああああっ……おっぱい犯されるの……凄く痺れるっ……ジッ……ジンジンする……！」

「犯しやすいように手で支えてくれる？ もっと激しく突き回せるようにさ。あ、でも、そっちを舐めるのも忘れないでね！」

「んふうっ……んっ……ちゅぷっ……ああっ……幸村君、やらしい……」

やらしいと言いながらも、命じられた通りにパイ舐めお掃除に小さな舌を精一杯伸ばす溜々菜。乳首への愛撫も休まず、華奢な指につままれたその先端はすでに硬く尖っている。

「はうっ……んっ……私、こんなにエッチだったの……？ 知らなかった……ゆ、幸村君のせい……でも、嬉しい。ありがとう……は、あっ……ちゅぷっ……もっど、もっど……エッチにして欲しい……」

うわごとのように眩きながら懸命に応えるその健気さに、ますます圭一は猛った。

ペニスによって埋没中の乳首も、亀頭に当たるコリコリした感触から、すでに勃起しているのは間違いなかった。肉竿の半分以上を乳房に呑み込ませて、なおも奥へとグイグイ挿入する。押し込むだけでなく右に左に回転するようにしてやると、柔らかな乳房全体がぶるんぶるんと震えて眼福だ。

ぐにゅにゅっ……ぶるんっ！ にゅちっ……ぶるんっ……にゅくくっ……ぶるっ！

「はあっ……気持ちいい……乳首犯されるの……好き……」

瑠々菜も自分から胸を押し付けて積極的にニップルファックを受け入れ、荒ぶるチンポと共に躍り狂うおっぱいに広がる甘く激しい官能に酔い痴れる。

ずにゅっ……にちゅうっ……ぐぼっ、ぬぼおっ……！

「ああっ……また……！ また来るっ……気持ちいいの、来ちゃう……！」

二度目のエクスタシーを予感して今度はその快感をより高めようと、乳房を愛撫する舌や指の動きをいつそう強め、高潮を迎えに行く。

「ううっ……お、俺もだ……イクよ！ 高瀬さんのおっぱいの中に、精液ブチまけるよ！」

「来て！ はああっ……もうイク……は、早く……あ、あああっ……！」

圭一とのシンクロフィニッシュを求める潤みきった切ない瞳。

「おっぱい、熱い……！ 熔けちゃう……！ 幸村君のおちんちんで……あ……ああっ！
来るっ……あああああああああああ……くうっ……駄目ええええーっ！」



「すればいいって……だ、だって……こんな内容……エッチなことなのよ!」
「平気だよ。だって、ユッキーにされて嫌なことだったら書かないもん。面白半分じゃないんだもん……全部ね! だから、この中から一枚引く。そうすれば証明できるでしょ」
間髪を容れずに、並べた紙の中から一枚を取り上げ、表に返す桜。
——幸村圭一に処女を捧げる権利。

「……っ!」

目を丸くする二人を尻目に、桜はいつもの調子を完全に取り戻してご機嫌だ。

「うん……いいわ。ユッキーにだったら、処女……あげられる」

「マ、マジでっ……!」

「ちよっと、圭一! 本気なわけではないですよ!」

「ううん、本気よく。嘘じゃないもん! ね、すぐにしよっ……」

そう言っつてピョンと立ち上がるや、L字ソファのはず向かいの圭一にじゃれつくようにしなだれかかる。最初のしおらしさはどこへやらだ。

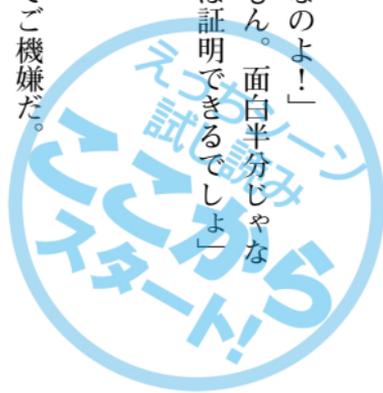
「う、うわっ……」

ふわっと薫る女の子のいい匂い。

溜々菜のときもそうだったが、これにやられると一瞬で理性が飛びそうになる。

「ねえ……桜の処女、捧げさせて……いいよね?」

「う……あ、う……」



(……なんじゃそりゃあああ！)

思いもよらぬ超展開に圭一は、なんと答えたものか言葉に詰まった。美卯も見てるし。そこに、寂しそうな顔を作った桜がとっておきの甘い声。

「桜じゃ駄目え？ 私のこと、嫌い？ ねえ、女の子に恥をかかせる気……？」

「そ、そんなこと……な、ないよ……駄目じゃ……ない……けど」

巧みに誘導され、押し切られ、押し倒されそうになる圭一。だがそのとき、大きな声。

「わっ、私もっ……するっ……！」

見ると、美卯がテーブルから一枚、権利書を取って高々と差し上げていた。それを見て桜がニツと目を細める。

(あっ……コイツ……！ 最初からこの反応を狙って……！)

この突拍子もない行動は、このためだったのかと圭一は悟った。

「お詫び」にかこつけて美卯を巻き込めば、もしかしたら考え直して権利書の小遣い稼ぎを認めてくれるかもしれない……ちよつと強引な気もするが、そういうことか？

(でっ、でも何で……？ どうして美卯は自分もするなんて!! 真面目なくせに!)

その辺りまでは理解できていないのは、女心のわからない彼のご愛敬といえよう。

それはさておき、美卯が手にした権利書の表に書かれていたのは……

——幸村圭一にクンニリングスをしてもらう権利

「クッ……クンニリングスウ……！」

なんつう権利を書いてんだ！ 悲鳴じみた叫び声を上げて、圭一は目を……いや、桜の頭を疑った。そんなプレイをカネ出して買う女子がいるとでも!? アホかお前は！

しかし、それを読んだ美卯は多少ドギマギしつつも、さほど衝撃を受けた風でもない。

「クンニリングスね……わ、わかったわ……お風呂ぐらい、小さい頃は一緒に入ったこと、あつ、あるもんね……洗うのぐらい……」

性的知識の乏しさによる、その盛大な勘違いに桜がジト目でツツコミを入れる。

「美卯ちゃん……クリーニングじゃないよ。クンニだよ……クンニっていうのはね……」
……十秒後、今度は美卯の口から叫び声が上がった。

そして……。

「駄目よっ……！ 絶対目を開けたらダメだからね！」

何度も念を押す美卯の前で、圭一は言われるがままに堅く目を閉じ、両手を腹に揃えて置いた状態でソファに真一文字の仰向けとなつて横たわっていた。

「美卯ちゃん、パンツ脱がないと……」
傍らの桜が促す声。

「うっ……うううっ……本当に……？ 直接……こんな汚いところを……？」

「洗ったんだし大丈夫！ それにユッキーは汚いなんて思わないよ！ ……でしょ？」
圭一に向けられた桜のその口調には有無を言わせぬものがあった。

実は、あれからすぐにこの状況になったわけではない。美卯はやっぱりお風呂を借りた。圭一をクリーニング……もとい、洗うためではなくて、自分を洗うためである。

もちろん、クンニというのがアソコを舐めてもらうことだと知って、ハイそうですかと洗いに行つたわけではない。

羞恥と嫌悪、誠実さと意地と……その他、なにか色々な感情との長い長い葛藤の拳句、言い出した言葉を引っこめることができず、せめてもの措置としてお風呂での洗浄だった。あるいは、心を決めるための一時退避という意味もあつたのかもしれない。

そうして美卯がバスルームにこもっている間に圭一は桜から作戦を伝授されていた。すなわち、「美卯ちゃんをHでメロメロにして権利書の良さをわからせる大作戦」——
つて、そのまますぎるだろ！

予想した通り、やっぱりこれは美卯を引き入れるための企てだったのだ。

しかし、反対する理由は何もない、むしろ、今後のためにも是非とも成功させたい。(そのためには……わかつているんでしようね)

と、桜には重々念を押されている。

全ては自分の頑張り次第なのだ。美卯にエッチを好きになつてもらわねばならない。圭一は目を閉じたまま、美卯に向かってコココクと何度も頷いてみせる。

「う、うん……きつ、汚くなんかいいよ……全然平気だつて！」

「けっ、圭一が良くて、わ……私が平気じゃないわよ……こ、こんなこと……」

美卯は、踏ん切りがつかないままでいるようだ。

（そりゃそうだ……恥ずかしいよな、フツ）

こんな彼女を果たしてメロメロになどできるのだろうか？

しかし、やらねばならぬ。権利書の存続のために、未来の酒池肉林のために！

自信はないものの、チンポだけすでにカチコチとなってスタンバイOKの状態だ。

そして、しばしの沈黙の後。

しゅる……。

衣擦れの音がした。

（脱いでる……俺のすぐ横で、美卯がパンツを下ろしてるんだ……）

彼女はご丁寧にも風呂から出た後、またしつかりとブレザーを着直していた。

むっちりと肉付きの良い、それでいてスラリと長い彼女の白い太ももを、それまで下腹

を覆っていた魅惑の布が滑り落ちていく……スカートは穿いたままだが、それがかえって

エロい。

想像することしかできないが、情景はありありと脳裏に浮かんだ。

そしてしばらくの間をおいて、ソファが沈む。美卯が乗って来たのだ。

むわ……と、ほのかな熱気が頭の辺りに漂い、おそらくその辺りに彼女の身体があるの

だとわかる。膝立ちで、自分を見下ろすような体勢だろうか。

「ああ……はっ、恥ずかしい……」

美卯の声。この期に及んで、どうしてこんなことをしているのかと当惑しているようだ。「大丈夫だって！ すぐに気持ち良くなるから……恥ずかしさも含めて、ね♡」桜が無責任に煽る。

「そのまま、ゆっくり腰を落として……オーライ、オーライ！ あっ……スカート、挟まないようにちよつと持ち上げて……」

「うっ、ううっ……ああん……いやあ……」

色っぽい羞恥の呻きと共に、熱気が圭一の鼻先に近づいてくる。

（ああ、そうだこれ……顔面騎乗じゃないか……！！）

ふざけて書いただけの「望月美卯に顔面騎乗してもらう権利」……それが、紆余曲折を経てその通りに実現しようとしている。それも、激怒していた当の本人、自らの意思で！（それって、すげーエロすぎる……っぷ！）

ぬしいっ……！

圧迫が顔面に接着した。柔らかで、温かくて、少し重くて、そして……濡れた接着！ 女性器の複雑な凹凸が一気に圭一の唇に押し付けられる。

くちや……。

「もごっ……」

「ひゃうっ！」

呻いた圭一の口の動きに反応して、美卯が艶やかな悲鳴と共にビクンツと腰を浮かす。

開けないという約束にも拘わらず、思わず開いた両の眼のど真ん前に広がる秘密の花園！

(うわあつ……みっ、みみみ、美卯のっ……お、オマ○コ……！)

それは幼い頃に一緒にお風呂に入れたときに目にしたシンプルな縦筋とはまったく違っていた。

まず、ふわりとした薄目の柔毛が生え揃っているということ。そして、ぼつてりと発達した肉壁の二枚貝。色素の沈着が少しもないことだけは記憶にある昔のままで、しかし、その綺麗な肉の裂け目にすうっと走るピンクの内壁の色が、あの頃とは違う匂い立つ女の成熟を示していた。

「みっ……見てないでしょうね！」

「見てないっ！ 見てません！」

振り向かれる前に慌てて再び目を閉じる。しかし、脳内にはバッチリくつきり、成長した幼馴染のアソコの姿が焼き付いている。

「でも、美卯ちゃん、見ないでクンニなんて無茶ブリだよ。せめて、しっかりくつつけてあげないと」

「わ、わかっているわよ……で、でも……恥ずかしいの……自分からなんて……ああつ……私、やっぱりできない……！ こんな、いけないことよ！」

「じゃあ、無理しないでやめたら？ 面白半分じゃないって証明するのは私一人でも……」

「……！」

それを言われると弱いらしい。美卯は羞恥を堪えて黙り込む。桜の援護射撃は的確だ。「す……するわっ！ わ、私だって、圭一になら……ううっ……へっ、平気なんだから！」明らかに平気ではない様子だが、それでも再びおずおずと腰を下ろし始める美卯。顔に近づくとオマ○コの気配に圭一がそつと舌を伸ばすと、それは湿った肉裂に優しく届いた。くちやり……。

「んあああっ！」

またしても跳ねる腰。

(美卯……敏感すぎじゃないか？ ちょっととしか触ってないのに……！)

もし、本格的に舐めたらどうなってしまうのだろうか？ 真面目な普段の彼女からは考えられないような痴態を想像し、股間が更に熱くたぎる。

と、ジィッ……ジジジ……という音がして、まさにその部分の圧迫が緩む。ファスナーが下ろされたのだ。続いてブリーフの前からもぞもぞと這いこむ小さな手。

……桜だ。

「あっ……お前っ……や、やめろっ……」

「……美卯ちゃんだけに恥ずかしい思いをさせるのは不公平だよね……ユッキーもちゃんと出すもの出してサービスしなきゃ！」

がさごそっ……もぞっ……。

「ちよっ……あうっ……くっ……」

まさぐられる指の動きだけで、喘ぎ声が出そうになる。抵抗しようにも美卯に跨がられているせいで身動きのしようがない。されるがままに勃起チンポを屹立させられてしまう。

「嘘……け、圭一のとって、昔はこんなんじや……」

美卯の比較の対象も記憶の中の幼い圭一だ。息を呑む気配が顔面に伝わって来る。

「お……大き……それに……子供のとくと……何か……違う」

「うふ、そっかあ、美卯ちゃん大人チンポ見るの初めて？」

そう言つて桜がペニスを手に取り抜き出す。

「こうするとね、もつと大おつきくなるんだよ……」

しゆる……しゆるるつ、しゆつ、しゆつ、しゆつ、しゆつ……。

勘所を心得た優しい力加減で輪にした指を肉茎に沿って上下させる。最初はゆっくりと、やがて徐々に速度を上げて。

「さ、桜ちゃ……そんなこと……!!」

何の抵抗もなく異性の性器に触れる友人に驚き、美卯が絶句する。だが、桜は照れも、やめようもしない。

「ほらほら、手の中で凄く熱くなつて来た。どんどん硬くなつてく……これさ、私の指が気持ちいいからだよね？ はあ……ドキドキしちゃう……」

嬉しそうに言いながら、ますます情熱的にチンポを追い込んでいく。

「あらあら、オチンチンの先つちよがヒクヒクし出したよ。もう出ちゃうのかなあ？」

しつかりしてよね、ユッキー。美卯ちゃんも気持ちよくさせてあげないと！」

ついに漏れ出た快感の呻きに対し、指先で優しく亀頭を弾く折檻。

「かはあつ……！」

ピコーン、ピコーンと何度も繰り返して弾かれ、右に左に大きく揺れるアンテナ。リズムカルに亀頭に当たる指先の打撃が心地よい痺れを生み出してゆく。

「うっ……ああつ！ さ、桜っ……それ……ヤバイって、や、やめる……うあつ、また！」
「にはははは、うりうりい！ やめて欲しかったら頑張りたまえ！」

（こいつっ、美卯を引き込むとかそういう目的とは関係なく、単純に自分も楽しんでるんじゃないか！ あうっ！ く……く……く……もうどうにでもなれだ！）

股間から全身に広がっていく快感。鼻の先がツキーンとするほどの興奮。

もう約束なんか守っていられるか！ 圭一は目を開くと美卯のお尻の中心、淫熱を放つ

蜜鬚のど真ん中に食らいついた。

しゃぶうっ……ぞるるるっ！

恥毛ごと肉鬚を口の中へと吸引する。ねとつく愛汁の味は女の味。それもすぐに自分の唾液と混ぜ合わせ、くちゅくちゅと音を立てるその部分を舌の腹で思い切り舐め上げる。

「ああんっ……はあんっ……やあつ！」

チンポに見入っていた美卯が自分の下半身へと意識を引き戻され声を上げた。

「やだあ……け、圭一の舌が……ああんっ……舌がっ！」

「ぢゆるるっ……き、気持ち……良いだろ？」

「良いわけではないっ……きっ、気持ち悪いに決まってるでしょ、こっ……こんな、ああんっ」
全否定する美卯だったが、零れる喘ぎ声は完全にそれを裏切り、確かに感じていることを示している。恥ずかしくてそれを認めたくないだけなのだ。

(よし、これなら……)

圭一は勇気を得て、更なる攻勢をかける。

「じゃあどうしてこんなにオツユが溢れてくるの？ 美卯のオマ○コ……凄くエッチな味だよ。もつと味わわせて欲しいな……」

「はっ、恥ずかしいこと言わな……」

ぢゆるるるっ！ ぢゆるるっ……ぢゆるるぢゆるるぢゆるるっ……！！

最後まで言わせず、尖らせた舌先を美卯の中にねじ込みわざと下品に音を立てて吸う。

「嫌あ……はあああああああつ……ん駄っ目えええええええええつ！」

悲鳴とも嬌声ともつかぬ叫び声。

桃尻がぶるんつと大きく揺れ、逃げようとする。それを許さず男の力で引き戻す。

手を回して左右から掴み、グツと力を込めて割り広げると大陰唇そして小陰唇。粘つく涎の糸を引きながら左右に開く美卯の身体への入り口。それをもう一度舐め倒す。

ちゅくちゅくちゅくっ……んちゆるるるるるるっ……ちゅぶちゅうううう！

「ほら、やっぱり気持ちいいんだ、凄いよ……ごくごく飲めるぐらい出て来る」





「ああんっ……ふあああああつっ！」

美卯が初めての熱濁体験に喜悅する。

「あ……熱いっ……！ 熱いのがビュービュー奥に当たって……膣内に……んああっ……私、初めてなのに膣内にいっ……！ ああ、でもっ……さ、桜ちゃんの言った通りよ……凄く……凄く気持ちいい……幸せな気持ち……あ、ああ……好き……圭一、好き……」

叫びながら、反らした身体をがくりとソファに沈み込ませてしまう。

「ふわ、ああ……しゃ、しゃくらは……オマ○コ……凄……良……にゃ」

腰砕けとなった桜もまた、ぐったりと美卯の身体の上に自分の身体を投げ出すのだった。

……と、思いきや。

「じゃ、じゃあ……ゆっひー、次は……しゃ、しゃくらの番……でしゅよ……」

と、ヘロヘロになりながらもソファの上で犬の姿勢になって尻を揺らしだす。

「お……お前……」

さすがに呆れた圭一だったが人のことは言えない。そんな彼女の貪欲ぶりに、射精したばかりのチンポは早くもムクムクと膨らみを取り戻しつつあった。

連続して二人の女の子に挿入……しかも、エッチにおねだりされて。

(こんなこと、人生でもう二度とないかも……)

「ねえ、早くう……桜のオマ○コを、美卯ちゃんと仲良しマ○コにしてえ……」
焦れて振り向く桜の顔は男を誘うメスの顔。

「桜ちゃんの……オマ……○コ……仲良し……!!」

絶頂の余韻に浸る美卯が、わけもわからぬまま桜の言葉を繰り返す。

抵抗がないのいいことに桜が美卯のおっぱいを弄り始める。そうしながら再び彼女の身体に跨がる先ほどの体勢になって、圭一に向かってお尻を突き出す。

「ね……お・ね・が・い♡」

指先を揃えた両手を股下に回し、陰唇を左右にくばあ……!

「私だけじゃなくて、美卯ちゃんにも挿入してあげていいからあ……もうっ! 女の子にこんなこと言わせないでよお……!」

(ふ、ふたり同時に……!)

桜のキツキツマ○コと、美卯のヌプヌプマ○コ、それをふたつ並べてあつちにズボズボ、こつちにズボズボ……!!

想像しただけで射精してしまいそうだ。

「あっ……ううっ! やあんっ……そ、そこっ……今、敏感に……んあっ、ああっ……!!」

桜にクリトリスをさすられて夢心地に喘ぐ美卯の声がダメ押しとなった。

(うわあああっ……辛抱たまらんっ!)

ジャキンと戦闘態勢に入った肉棒を奮い立て、桜の洞穴に突撃!

前戯など必要なし。それはすでにさんざん、イクほどやった。

ちゅぶっ……。

濡れた入り口は容易く圭一を受け入れて……しかし、そこからが大変だった。

「ううっ！ き、きつい！」

潤滑はする……しかし、狭い！ しかも狭いばかりか、なんだか明らかにぎゅうーっと締め付けてくる。

め……ち……ぬち……ぎゅううううっ……ううううううっ……！！

「痛っ……」

桜がンツと歯を食いしばる。

「痛いなら、やめた方が……」

「い、いいの……その……まま……私は、初めてのとき痛いタイプだって……思ってた、から……んんっ……だから……最初は……練習相手で……っ……やめちゃ駄目……ぬ、抜かないで！ お願ひ、そのまま……奥まで……！ 好きな人相手のときにも……ちゃんどできるって確かめさせて……」

そういうことだったのか……と、単純に納得する気はもはやさらさらなかったが、それでも、眉をぎゅつと寄せて目を閉じ、下唇を嚙んでなお耐えるその顔に嘘はないようだ。

ついさつきまで軽いノリだったお調子者が見せた初めての真面目な表情には、少しかけキュンとくるものがあった。

エッチをする権利書。男の子とエッチをする権利。

一生恋人ができないと思ひ詰めていた溜々菜にはそれが必要だった。

美卯は……奥手で真面目すぎて、もし権利書がなかったら自分の気持ち伝えることができたろうか。

そして、一見ただのエロっ子のように振舞っている桜にも……それは必要だったのだ。そうだ。誰が恋愛じゃなければエッチをしてはいけないと決めたんだ。

全ての女の子には、エッチをする権利がある！

「わかったよ……でも、せめて……ちよつと力を抜けないか？ お前、絶対これ自分でも締めてるだろ？」

「あ……！」

みるみる桜の頬が朱に染まる。

「つっ、つい緊張しちゃって……！」

「うわっ……」

「な、なによっ！」

「いや、恥ずかしがる桜って初めて見たかも……」

その一言で、ますます桜の頬が赤くなる。

「そっ……そんなこと……ないんじゃない……かな……」

「そんなことあるって……すげー可愛いよ」

思ったままを口にする圭一。彼には打算というものがない。イケメン発言など計算ではできないのだ。それがわかっているから、桜はもうどうにもならなくなる。

「もう、馬鹿っ！ そんなこといいから、早くオチンチンッ！」

「あっ……ゴメン……！」

「もう、ホント馬鹿……あっ……ううっ！ い、ぎぎぎ……は、挿入って……くう……る

……は、ああっ……オマ○コの中……みちみちって……いって……るう……」

「だから、力抜けて……」

ぬぼおっ！

桜が大きく息を吐くように喘いだ瞬間、チンポが何かの関所を潜り抜けた。ぬるっと滑り込むようにして大きく肉棒が前に進む。

「……っはあんっ！」

(急に動かしやすくなった……これなら！)

みっちりとした肉雪を掻き分ける除雪車となって腰をねじ込む。

ぐ……ぐぐっ……ぐぼっ……にゅくっ……ぐにゅうううっ！

「ああーっ！ はあっ……挿入ってるう……オマ○コの中、全部ユッキーになってるう！」

じゅぼ……ちゃぼ、んぐっ……じゅぶっ、じゅぶっ！ じゅぶじゅぶっ……ずぶうっ！

開通して雪解けのごとくに溢れる春の蜜。それが膣内のペニスを浸して淫らな小川のせせらぎとなる。そうなってしまえば源流を探り当てるのは簡単だった。

ずうんっ！

突き当りへの衝突。グリッと亀頭に感じる小さな突起。

(なんだろうこれ……あ、もしかして子宮口ってやつか……!!)

子宮が下りて来るというようなことをエロ漫画か何かで読んだことがある。

女が感じてくると、膣内の子宮口が指で触れる位置まで下がってくるのかなんとか。

……これがそうなのか？

本当にそうかわからぬまま、形を確かめるようにクイッククイッとペニスの先で突き回すと、桜が異常に悶え始めた。

「やつ……あつ、そこつ……なつ、なにしてるのおつ……いやつ……すつ、凄く……かつ……感じるつ……！ 感じ……すぎる……！ ああつ……んはあああああつ！」

(このヨガリ方……やっぱり子宮口なのかな？ 子宮口って感じるんだ？ なんかわかんないけど、でも……弱点発見ってことだな！ 徹底的に攻めてやれ！)

圭一は腰をやや引いて体勢を整えると、いよいよ本格的にその部分を突き出した。

穴というよりは小豆大の肉瘤のように感じる。亀頭の触感だよりなのでよくわからないが、けっこう弾力もあつて突き応えが良い。

ぐにゅつ、ぐにゅつ、くりゆりゆつ……くぷうつ！

「ひいんつ……おほおつ……んをつ！ おおおつ！ だ……駄目……そこつ……弱い……うあああつ……ああつ……駄目えつ……駄目つ……あああ、いいつ！ 気持ちいいつ！ 良すぎて駄目えつ……ああんつ、出ちゃう！ なんか出ちゃう！ オシッコ出ちゃう！ 駄目つ！ 駄目駄目駄目、駄目だったらあゝつ！」



じゅわっ……ぷっ、ぷぷっ……ぷっしゅ……ぷっしゅ……!

膣内から淫水が零れ出て、あちらへこちらへと少しづつ弧を描いて飛び散り始める。圭一はかまわずもう一度腰を引き、狙い定めて子宮口と思しきその中心へと叩きつける。ずうううううんっ!

「んぐひいうううーっ!」

アヘった桜がビリビリと震えながら背筋を反らす。その身体を後ろから抱きとめると、圭一はそのままペニスの先端をぎゅうーっと押し付けた。

「あ、あ、ああ……キスされてる……オマ○コの奥……桜の奥に、おちんちんが……きっ……きしゅしてりゅううううっ!」

ビビビビッ……ビゲンッ! ビゲンッ!

間違いなく絶頂の痙攣。

抱き締めた全身から伝わる快樂震動。そして、肉棒もまた膣の悦震で一緒に震える。

ブブッ……ブブブッ……ブブブルッ……ブルッ……!

にゆるんっ!

子宮口からペニスの先端がズレた。ぐったりと力が抜けていく桜を再び美卯に覆い被せると、圭一はゆっくりとピストン運動を開始した。

「桜……美卯……一緒に突いてあげるよ、二人があとでケンカしないように……!」

見下ろせば、噴き出した潮に混じって赤い破瓜の血が桜の細い太ももを伝い落ちていく。

そして、その下に開かれたままの美卯の脚の付け根、小陰唇のピンクの中にも滲む深紅。
(二人とも……二人ともこの処女が、俺のものに……！)

ずぼあっ！

桜のマ○コから引き抜いたチンポを美卯のマ○コに。こうして交互に入れ替えるとうまくわかる。やっぱり美卯のは絡みつく。ねっとりしたいやらしいオマ○コだ。

「う……あ、け、圭……ま、また……おちんちん……！ 挿入れてるの……！」

ようやく夢うつつから覚めた美卯が声を上げる。

「ああ、もう一回イカせてやる！ 桜と一緒に……このチンポで！」

「ええっ!? 桜ちゃんと……!!」

「えへへえ……また一緒にイこうね……」

ずぼおっ！ ぬぷうっ！

「ああっ！」

「んあんっ……来たあっ♡」

引き抜く、挿入れる。突き込み、また抜く。

ぬぼあっ、じゅぷうっ……ずぐうっ……ずどっ……ぬびいっ……にゅばあっ！

「ああんっ！ はあっ……アンツ！ あんっ、あんっ！ ああ、で、出たり入ったりいっ

……やあんっ……はあっ！ ああっ、またっ！ おちんちん、またあっ！」

「くふうんっ！ 美卯ちゃん……一緒だよ！ 一緒に突いてもらってるよ！ ああっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫姫
S.E.V.E.N

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリィダム120%!?
ジャンルにこだわらない
ドキドキラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？



あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍しつこめなエッチノベル！

二次元ぷち文庫



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化！



異世界
で生きる
妹は
可愛い？

ドキドキラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

姫騎士 クラズメイト！
ビギニングノベルズ